

新製品発売のご案内

[ESOTERIC名盤復刻シリーズ]

ワーグナー: 楽劇「トリスタンとイゾルデ」(全曲)

カルロス・クライバー(指揮)
シュターツカペレ・ドレスデン
ライブツヒ放送合唱団

ヴェルディ: 歌劇「オテロ」(全曲)

ヘルベルト・フォン・カラヤン(指揮)
ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
ウィーン国立歌劇場合唱団

エソテリック株独占販売 2018年6月22日 発売

ワーグナー: 楽劇「トリスタンとイゾルデ」(全曲)

カルロス・クライバー(指揮)
シュターツカペレ・ドレスデン
ライブツヒ放送合唱団

- 品番: ESSG-90183/85(3枚組)
- 仕様: Super Audio CD ハイブリッド
- 定価: 10,833 円+税
- POS: 4907034222063
- レーベル: Deutsche Grammophon
- 音源提供: ユニバーサルミュージック合同会社
- ジャンル: 楽劇



ヴェルディ: 歌劇「オテロ」(全曲)

ヘルベルト・フォン・カラヤン(指揮)
ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
ウィーン国立歌劇場合唱団

- 品番: ESSD-90186/87(2枚組)
- 仕様: Super Audio CD ハイブリッド
- 定価: 7,222 円+税
- POS: 4907034222070
- レーベル: DECCA
- 音源提供: ユニバーサルミュージック合同会社
- ジャンル: 歌劇



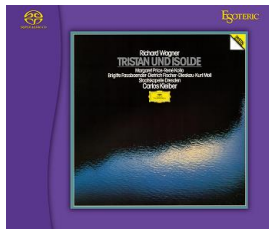
- DSD MASTERING/Super Audio CD 層: 2チャンネル・ステレオ[マルチなし]
- 美麗豪華・紙製デジパック・パッケージ使用

“Super Audio CD”と“DSD”は登録商標です。

エソテリック株式会社(代表取締役社長 大島 洋)は、「名盤復刻シリーズ」Super Audio CDハイブリッド盤2作品を発売開始いたします。

今回の作品は、定評の丁寧なマスタリング作業によってSuper Audio CD化され、音質の向上はもとより、作品が本来備えた音楽的魅力を改めて浮き彫りにし、新たなる感動を約束するものに仕上がっています。この2作品はエソテリック株式会社の独占販売で、主にオーディオ販売店で販売されます。

[アルバムの特徴]



ワーグナー：楽劇「トリスタンとイゾルデ」(全曲)

ルネ・コロ(T)、マーガレット・プライス(S)、クルト・モル(Bs)、ディートリヒ・フィッシャー＝ディースカウ(Br)、ブリギッテ・ファスベンダー(A)
カルロス・クライバー(指揮)
シュターツカペレ・ドレスデン・ライブツィヒ放送合唱団

クライバー最後のセッション録音となった空前の「トリスタン」が、世界初 Super Audio CDハイブリッド化。

■ESOTERIC ならではのこだわりの Super Audio CD ハイブリッド・ソフト

オリジナル・マスター・サウンドへの飽くことなきこだわりと、Super Audio CD ハイブリッド化による圧倒的な音質向上で確固たる評価をいただいている ESOTERIC 名盤復刻シリーズ。発売以来 LP 時代を通じて決定的名盤と評価され、CD 時代になった現代にいたるまで、カタログから消えたことのない名盤を高音質マスターから DSD マスタリングし、世界初の Super Audio CD ハイブリッド化を数多く実現してきました。カルロス・クライバーの名盤は、当シリーズでもこれまで「ブラームス：交響曲第 4 番」、「シューベルト：交響曲第 8 番《未完成》& 第 3 番」、「J. シュトラウス：喜歌劇《こうもり》」、「ヴェルディ：歌劇《椿姫》」(グレイト4オペラズのセット)と 4 点を発売してきましたが、今回はその真打ともいふべき、ワーグナーの楽劇「トリスタンとイゾルデ」を世界で初めて Super Audio CD ハイブリッド化いたします。

■クライバー最後のセッション録音にして、クライバーが指揮した唯一のワーグナー

録音嫌いでも知られたカルロス・クライバー(1930-2004)が正規のセッション録音で残したオペラ全曲盤はわずか4つ。そのうち最後のセッション録音となったのが、1980年から1982年にかけて3年がかりで収録されたワーグナーの「トリスタンとイゾルデ」です。クライバーが初めて「トリスタン」を指揮したのはシュトゥットガルト・オペラ時代の1969年9月のことで、故ヴィーラント・ワーグナーの演出プランと舞台装置をもとに、トリスタン役のヴォルフガング・ヴァントガッセンが演技指導をする形での新演出で、ヴァントガッセンのほかイングリット・ビョナー、オットー・フォン・ロール、グスタフ・ナイトリンガーら当時の名歌手を揃えた公演は絶賛を浴びました。1973年にはウィーン国立歌劇場に「トリスタン」でデビュー、さらに翌1974年から1976年にかけてはバイロイト音楽祭でも「トリスタン」を指揮するなど、このオペラは、「ばらの騎士」、「オテロ」、「椿姫」などと並んで、1970年代のクライバーにとっては必ず成功を収めることのできる十八番ともいえる代表作となりました。そうした状況を受けて、ドイツ・グラモフォンはバイロイト音楽祭などでライブ収録を提案したものの、長時間の公演での歌手の疲労やオーケストラとの不十分なバランスなどを憂慮したクライバーの同意を得ることができず、最終的には、クライバーが1973年に「魔弾の射手」で初めてセッション録音を手掛けた時のパートナーである名門オーケストラ、シュターツカペレ・ドレスデンを起用し、セッション録音のプロジェクトとして実現したのです。



© Siegfried Lauterwasser / DG

■ 意外なイゾルデ役の選択も含め、当時最高のキャストが集結

キャストもクライバーの希望で綺羅星のごとき名歌手が結集しています。トリスタンにはちょうど同役を手掛け始めていたルネ・コロ、マルケ王には既にバイロイト音楽祭でクライバーと共演していたクルト・モル、ブランゲーネにはミュンヘンの「ばらの騎士」や「こうもり」でクライバーの盟友だったブリギッテ・ファスベンダー、クルヴェナールには伝説的なフルトヴェングラーの「トリスタン」全曲盤にも参加していたディートリヒ・フィッシャー＝ディースカウが起用されるなど文字通り完璧な布陣。往年の名テノール、アントン・デルモータが第3幕に登場する牧童というチョイ役でカメオ的に出演しているのも印象に残ります。歌手の選択で意外だったのは、クライバーがイゾルデ役に、モーツァルト歌手として一世を風靡していたマーガレット・プライスを敢えて起用したことでしょう。イゾルデ役はもちろんのこと、ワーグナーのオペラとも縁がなかったプライスは、既成概念に縛られず、ピュアでのびやかかつ情熱的な声と明確なドイツ語のディクションとで、クライバーの望む通りのイゾルデ像を描き出しています。

■ 大歌手も納得したクライバーの演奏解釈

クライバーはセッション前にオーケストラだけのリハーサルを10回要求するなど万全を期し、歌手、合唱団とも綿密なピアノ・リハーサルを重ねてセッションに臨み、クルト・モルは「クライバーはこの作品のあらゆる細部まで知り尽くし、細かく分析的なリハーサルを積み重ねていったのですが、その結果は頭ではなく、あくまでも心と感情から出た音楽になったのです」とその音楽作りに共感を寄せ、さらに大ヴェテランのフィッシャー＝ディースカウも「これは、私の生涯で、本当の意味でリハーサルをすることができる指揮者と共演した最後の機会でした。リハーサルで指摘されるあらゆることが大切だと実感できたのです」と振り返るほどの充実度を感じていました。史上初の「トリスタン」全曲録音となったフルトヴェングラー盤以来、ショルティ、バーム、カラヤン、バーンスタインら、20世紀の名だたる名指揮者たちがそれぞれの個性を傾注してこのオペラの名盤を刻んできましたが、その中でもオーケストラと歌手の充実度、そしてこのオペラの底知れぬ深みを優秀なサウンドで捉えた全曲盤として、このクライバー盤は一頭抜きん出た存在感を示しています。

■ ルカ教会での優秀デジタル録音

録音が行われたドレスデンのルカ教会は、19世紀末から20世紀初頭にかけて建立され、第2次大戦中のドレスデン爆撃によって大きな打撃を受けたものの、1950年代後半からはオーケストラの練習及び録音に用いられるようになり、1960年代からは録音用スタジオとしての機能が段階的に整備され、ヨーロッパ随一の録音会場として知られるようになりました。教会といっても現在の内装は明るくモダンで、響きもクリアで明澄、過度な残響もなく、大規模なオーケストラやオペラの録音でもサウンドが混濁しないため、東ドイツが共産主義時代だったからさまざまな録音に起用されてきました。このクライバーの「トリスタン」でもその伝説的なサウンドは健在で、歌手の歌唱の背後に大きく広がる深みを湛えたオーケストラは、決して各パートの明晰さを失わず、クライバーの要求する幅広いダイナミックス(特に弱音の領域の表現の精緻さが捉えられているのはデジタル録音ならでは)を申し分なく捉えています。第1ヴァイオリンを左側、第2ヴァイオリンを右側に分け、その間にヴィオラとチェロ、中央奥にコントラバスを置くという独特のオーケストラ配置は晩年のクライバーがこだわったものでした。デッカのオペラ録音などでよく用いられた(同時発売されるカラヤンの「オテロ」でも顕著)、登場人物の舞台上での動きを音化したり、効果音や空間性を誇示したりすることもなく、固定化した音像に終始するのも、かえってこの「トリスタン」というオペラには相応しく、音楽そのものの深みに思う存分浸りることができます。

■ 音楽の流れを途切れさすことなく、最高の状態での Super Audio CD ハイブリッド化が実現

この「トリスタン」は当初LP5枚組で発売されましたが、音楽の流れを途切れさせたくないというクライバーの「強い希望によって」、各面の切れ目はフェイドイン/フェイドアウトで処理されていたのも異例でした。1986年にCD化された時には4枚に切られ、その処理が踏襲されましたが、その後DG OriginalsでのOIBPマスタリング盤では各幕をディスク1枚に収める編集がなされ、クライバーの希望通り、途切れることなくこのオペラを味わうことができました。今回のSuper Audio CDハイブリッド化に当たっては、これまで同様、使用するマスターテープの選定から、最終的なDSDマスタリングの行程に至るまで、妥協を排した作業が行われています。特にDSDマスタリングにあたっては、DAコンバーターとルビジウムクロックジェネレーターに、入念に調整されたESOTERICの最高級機材を投入、またMEXCELケーブルを惜しげもなく使用することで、オリジナル・マスターの持つ情報を余すところなくディスク化することができました。

■「空前の《トリスタン》がここにある」

「マーガレット・プライスのイゾルデが素晴らしい。強くはあっても、暗くも重くも太くもないプライスの声が、クライバーのもとでイゾルデを歌ことによって、最大限生かされている。モルのマルケ王もいいし、コロのトリスタンもいいが、その持ち前の声を活かして完璧にうたったプライスの素晴らしさにはおよばない。」
（『クラシック・レコード・ブック 1000 VOL.6 オペラ&声楽曲編』、1986年）

「引き締まった力によって音楽の最深部にまで精妙な光を当てた点で、カルロス・クライバーの演奏はすぐれてユニークである。この楽劇の官能性やロマンティックな情感をしなやかに抑えて、愛の悲劇を厳しいまでの美しさをもって鋭く浮き彫りにしており、しかも、その底には、あくまで澄んだ情熱が燃えている。マーガレット・プライスをイゾルデ役に起用したのも、そうした澄んだ陰翳の深さと品格を演奏に求めたからだろう。そのプライスをはじめ、ルネ・コロのトリスタン、クルト・モルのマルケ王も立派である。」
（『ONTOMO MOOK クラシック名盤大全 オペラ・声楽曲編』、1998年）

「クライバーの《トリスタン》は、内側へ、下方へと沈んでゆく。激しく情念や官能性を噴出させるのとは全く逆の方向を持っている。エネルギーは凝縮されていくことで高まる。この驚異的な作品の、ドラマと音楽との基本構造にかなっているというべきかもしれない。劇場においてはためらわずに力を解放させ、拡大する渦の中に聴く者を巻き込んだクライバーは、この録音でそれとは異なる演奏を行った。しかし凝縮されていくエネルギーは、解放以上に聴く者をとらえる。空前の《トリスタン》がここにある。プライスのイゾルデ、コロのトリスタンなど、歌手たちの歌は優れているだけでなく、指揮者の音楽に見事に合致している。」
（『クラシック不滅の名盤 800』、1997年）

「クライバーの指揮でうたっているときは「天に昇っていけるし、地獄に墮ちることだってできる」と言ったのは、確かコトルバスだったが、プライスもそうだったのだろうと思わせるほど、このイゾルデは素晴らしく、そして美しい。コロのトリスタンをはじめ共演者たちも非常に充実しているが、何よりも素晴らしいのはプライスを起用したクライバーの慧眼と指揮である。」
（『クラシック不滅の名盤 1000』、2007年）

【収録曲】

ワーグナー：楽劇「トリスタンとイゾルデ」（全曲）

3幕の劇/台本：リヒャルト・ワーグナー

【配役】

トリスタン	ルネ・コロ(テノール)
イゾルデ	マーガレット・プライス(ソプラノ)
ブランゲーネ	ブリギッデ・ファスベンダー(アルト)
マルケ王	クルト・モル(バス)
クルヴェナール	ディートリッヒ・フィッシャー＝ディースカウ(バリトン)
メロート	ヴェルナー・ゲッツ(テノール)
舵取り	ヴォルフガング・ヘルミヒ(テノール)
若い水夫	エーバーハルト・ビュヒナー(テノール)
牧童	アントン・デルモータ(テノール)

歌唱指導：ヘルムート・ヴィーゼ

ライブツィヒ放送合唱団（合唱指揮：ゲアハルト・リヒター）

シュターツカペレ・ドレスデン

指揮：カルロス・クライバー

【トラックリスト】

【DISC1】

【1】 前奏曲

第1幕

- 【2】 第1場「西の方へ目は向くが」（若い水夫、イゾルデ、ブランゲーネ）
- 【3】 第2場「さわやかな風は故郷へと吹いて行く！」（若い水夫、イゾルデ、ブランゲーネ、クルヴェナール、合唱）
- 【4】 第3場「ああ、何ということをも！」（ブランゲーネ、イゾルデ、合唱）
- 【5】 第4場「さあ！ご婦人がた」（クルヴェナール、イゾルデ、ブランゲーネ）
- 【6】 「トリスタン様お入りください！」～第5場「お姫様、おっしゃって下さい、何をお望みですか」（イゾルデ、トリスタン、合唱）

- [7] 第5場「トリスタン！」「イゾルデ！」「不実にして優しき人」
(イゾルデ、トリスタン、合唱、ブランゲーネ、クルヴェナール)

[DISC 2]

[1] 前奏曲

第2幕

- [2] 第1場「狩の物音がまだあなたに聞こえる？」(イゾルデ、ブランゲーネ)
[3] 第2場「イゾルデ！愛する人よ！」「トリスタン！愛する人よ！」(トリスタン、イゾルデ)
[4] 「おお、降り来よ、愛の夜を」(トリスタン、イゾルデ)
[5] 「寂しく私が見張るこの夜に」(ブランゲーネ)
[6] 「聞いてください、恋人よ！」(イゾルデ、トリスタン)
[7] 「けれども私たちの愛は」(イゾルデ、トリスタン)
[8] 「こうして私たちは死ねばよい」(トリスタン、イゾルデ、ブランゲーネ)
[9] 第3場「お逃げなさい、トリスタン様！」(クルヴェナール、トリスタン、メロート)
[10] 「本当に守ったのか？」(マルケ王)
[11] 「王よ、それには答えられません」(トリスタン、イゾルデ、メロート)

[DISC 3]

[1] 前奏曲

第3幕

- [2] 第1場 シャルマイ(牧笛)の音
[3] 「クルヴェナールよ！クルヴェナールよ！」(牧童、クルヴェナール、トリスタン)
[4] 「どうしてここへですって？」(クルヴェナール、トリスタン)
[5] 「まだ光は消えなかった」(トリスタン、クルヴェナール)
[6] 「まだ船は見えません！」(クルヴェナール、トリスタン)
[7] 「死んだのですか？生きていますか？」(クルヴェナール、トリスタン)
[8] 第2場「この太陽！この昼！」(トリスタン、イゾルデ)
[9] 「ああ！私です、私です、あなたが愛するイゾルデです」(イゾルデ)
[10] 第3場「クルヴェナールよ！もう一隻船が」(牧童、クルヴェナール、舵取り、ブランゲーネ、メロート、マルケ王)
[11] 「穏やかに、静かに、彼が微笑み」(イゾルデの愛の死)(イゾルデ)

[録音]1980年8月26日、27日、29日、31日、10月18日～26日、
1981年2月5日～10日、4月10日、21日、1982年2月27日、4月4日、ドレスデン、ルカ教会
VEBドイツ・シャルブラッテン(当時のドイツ民主共和国、ベルリン)との共同制作

[初出]2741 006(1982年)

[日本盤初出]00MG0440～4(1982年12月25日)

[オリジナル・レコーディング] デジタル・レコーディング

[プロデューサー]Dr.ハンス・ヒルシュ

[ディレクター]ハンス・ヴェーバー

[レコーディング・エンジニア]カール＝アウグスト・ネーグラ

[エディター]ヨープスト・エーバーハルト、ライナー・ヘプフナー、ラインヒルト・シュミット

[Super Audio CD プロデューサー]大間知基彰(エソテリック株式会社)

[Super Audio CD リマスタリング・エンジニア]杉本一家(JVC マスタリングセンター(代官山スタジオ))

[Super Audio CD オーサリング]藤田厚夫(有限会社エフ)

[解説]諸石幸生 渡邊 護

[企画・販売]エソテリック株式会社

[企画・協力]東京電化株式会社

[アルバムの特徴]



ヴェルディ:歌劇「オテロ」(全曲)

マリオ・デル・モナコ(T)、レナータ・テバルディ(S)、
アルド・プロッティ(Br)

ヘルベルト・フォン・カラヤン(指揮)

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

ウィーン国立歌劇場合唱団

これぞ 20 世紀演奏・録音史上、世界遺産級。デル・モナコとカラヤンがドラマティックに描き出す空前の「オテロ」。

■ ESOTERIC ならではのこだわりの Super Audio CD ハイブリッド・ソフト

オリジナル・マスター・サウンドへの飽くことなきこだわりと、Super Audio CD ハイブリッド化による圧倒的な音質向上で確固たる評価をいただいている ESOTERIC 名盤復刻シリーズ。発売以来 LP 時代を通じて決定的名盤と評価され、CD 時代になった現代にいたるまで、カタログから消えたことのない名盤を高音質マスターから DSD マスタリングし、世界初の Super Audio CD ハイブリッド化を数多く実現してきました。カラヤンが「ヨーロッパ音楽の帝王」と称された、ウィーン国立歌劇場監督時代に録音され、それ以後上演・録音問わず、この作品のスタンダードであり続けているヴェルディの「オテロ」全曲盤を、世界初 Super Audio CD ハイブリッド化で発売いたします。

■ 「帝王カラヤン」が確立した時代



ヘルベルト・フォン・カラヤン(1908～1989)は、レコード録音に対して終生変わらぬ情熱を持って取り組んだパイオニア的存在であり、残された録音も SP 時代からデジタル録音まで、膨大な量にのびります。その中でカラヤンが一つの頂点を迎えたのは、1955 年にベルリン・フィルの常任指揮者、翌 1956 年にザルツブルク音楽祭およびウィーン国立歌劇場の芸術監督に就任、またミラノ・スカラ座との提携上演を打ち出してイタリアでの地盤も強化するなど、文字通りヨーロッパ・クラシック音楽界の「帝王」と目されていた時期でしょう。さらに録音面でも、1950 年代初頭から継続しているロンドンでのフィルハーモニア管弦楽団との EMI への録音に加えて、1959 年からはベルリン・フィルとはドイツ・グラモフォンへの、ウィーン・フィルとはデッカへの録音がスタートし、ちょうどステレオ録音が導入されて活気付いていたレコード市場を席卷する形になりました。一人の指揮者がここまでの音楽的ポストとレーベル契約を手中にするのはカラヤン以前にもカラヤン以後にも皆無で、文字通り 20 世紀クラシック音楽界で空前絶後の存在でした。

■ 不滅の価値を持つ「オテロ」全曲盤

そうした中でも、名プロデューサー、ジョン・カルショウとのコラボレーションによって、ウィーン・フィルと進められたデッカへの録音では、スタンダードなシンフォニーのみならず、「ツァルトウストラはかく語りき」や「惑星」のパイオニア的録音も含む多様なオーケストラ曲のほか、1959 年の「アイーダ」から 1963 年の「カルメン」まで、綺羅星のような豪華キャストをそろえた 5 つのオペラ全曲盤が制作されました。いずれもオペラ録音史にその名を残す名盤ばかりですが、その中でも 1961 年録音のヴェルディ「オテロ」は、不世出の名歌手マリオ・デル・モナコ(1915～1982)との共演の記録として、不滅の価値を持つ全曲盤です。

■ カラヤンの愛奏曲

カラヤンがウィーン国立歌劇場で初めて「オテロ」を取り上げたのは 1957 年 4 月のこと。歌手もデル・モナコのほか、リザネク、ザンピエーリ、コルツァーニら豪華キャストを揃え、指揮のみならず演出も自ら

が手掛けた新演出で、大きな成功を収めました。この後カラヤンはウィーン在任中にこのプロダクションを19回も指揮しており、「ワルキューレ」(25回)に次いで上演回数が多いオペラ(「アイダ」や「トスカ」よりも多い)であり、彼がいかにこのオペラを愛していたかの証左となりましょう。その4年後に録音されたこの録音でも、その熱愛ぶりは伝わってきます。アリアや二重唱などのナンバー制を廃し、ワーグナーの指導動機を思わせるような「オテロ」の緊密な音楽構成は、ワーグナーやシュトラウスを得意とするカラヤンにもアプローチしやすい作品であり、ここでもウィーン・フィルの暗く濃密な響きを活かし、千変万化する登場人物の心理の動きに寄り添い、緊張感に満ちた音のドラマを描きあげています。

■ デル・モナコ極め付きの絶唱

歌手陣では何と云っても、「オテロを歌わせたら モナコの前にモナコなく モナコの後にモナコなし」と称賛され、「オテロ」の代名詞的存在だったデル・モナコの絶唱にまずは指を屈するべきでしょう。オペラ歌手として活動した22年間で427回もオテロを歌ったほど自らの当たり役にしていたデル・モナコの最円熟期の歌唱が、鮮明なステレオ録音と理想的な共演者によって残されたのは、20世紀演奏・録音史上、世界遺産級の意味合いを持つことだといえましょう。凜然と輝くトランペットに譬えられた強靱な声は、難役オテロのドラマと苦悩を余すところなく描き出しています。第3幕の「神よ、あなたは」や第4幕の「オテロの死」における毅然たる歌唱にまじる涙声は、デル・モナコのもう一つの当たり役である「道化師」の「衣装をつける」でのそれと双璧で、今でも聴く者の心を揺さぶります。レナータ・タバルディ(1922~2004)の清純の極みともいふべきデズデーモナ、降板したバステアニーニの代役として参加したアルド・プロッチィ(1920~1995)の小悪党的なアイーゴなど、共演者も万全である点も、この全曲盤の特徴といえるでしょう。



■ 最高の状態での Super Audio CD ハイブリッド化が実現

録音はデッカのウィーンでの拠点だったゾフィエンザールで行われました。響きが多いため必ずしも録音向きではないムジークフェラインザールとは異なり、フル・オーケストラを音が混濁せず細部まで明晰な収録が可能でゾフィエンザールはデッカのステレオ録音の代名詞であり、ショルティの「指環」をはじめとする今や伝説的な名録音がジョン・カルショウやゴードン・パリーによって続々と生み出されました。この「オテロ」でも、デッカのステレオによるオペラ録音に特徴的な、オーケストラをスケールの大きな響きで捉えつつ、各パートの明晰さを保ちながら、歌手の声を包み込むようなバランス作りが実現しています。また同じくデッカのオペラ録音の代名詞でもある、ステージ上演の臨場感を録音に持ち込む SONIC STAGE の手法が極限まで活用され、各場面での登場人物の位置関係や左右の動き、効果音(第1幕冒頭の嵐や大砲)、遠近感(第3幕の舞台転換の時のオフステージのバンダやコーラス)など、ステレオ効果を活かした演出がされているのも大きな特徴といえるでしょう。名盤・名録音ゆえに



デジタルの初期からCD化され、Decca Legendの24bit/96kHzリマスタリング盤もありますが、今回はそれ以来の、そして初めてのDSDリマスタリングとなります。今回のSuper Audio CDハイブリッド化に当たっては、これまで同様、使用するマスターテープの選定から、最終的なDSDマスタリングの行程に至るまで、妥協を排した作業が行われています。特にDSDマスタリングにあたっては、DAコンバーターとルビジウムクロックジェネレーターに、入念に調整されたESOTERICの最高級機材を投入、またMEXCELケーブルを惜しげもなく使用することで、オリジナル・マスターの持つ情報を余すところなくディスク化することができました。

■『オテロが乗り移ったような迫真の歌唱は、聴き手を身震いさせずにはおかない』

「カラヤンの指揮はどのフレーズも歌を歌い、それが絡み合い、くねりあい、離れてゆく。そしてそのたびごとに官能的な匂いを残している。デル・モナコの円熟振りも目立ち、ここでも水を得た魚のようにピタリ融和している。テバルディも最上の出来といえ、無理のない美しい声がたつぷりと聴ける。プロッティも絶唱。すばらしい「オテロ」である。」
(推薦盤、『レコード芸術』1962年1月号)

「デル・モナコのオテロが乗り移ったような迫真の歌唱は、聴き手を身震いさせずにはおかない。まさに極めつけである。声でこれだけの芝居ができる歌手が他にいるだろうか。カラヤンの指揮も整然とした中に、燃え立つような激しい情念が迸り、スケール壮麗な演奏を聴かせている。」
(『クラシック・レコード・ブック 1000 VOL.6 オペラ&声楽曲編』、1986年)

「デル・モナコの迫真の歌唱は音を聞いただけでも情景がはっきりと浮かんでくるほど。まさに千両役者の芸である。それにテバルディのデズデーモナの初々しい歌唱が対峙し、腹黒さを内に秘めたプロッティのイアーゴも独自の存在感を示す。カラヤンはウィーン・フィルの豊麗な響きを活かし、緻密で重厚なタッチで人物の背景を描く。それはややワグナーに傾いている印象もあるが、雄弁な語り口には舌を巻くばかりだ。」
(『ONTOMO MOOK クラシック名盤大全 オペラ・声楽曲編』、1998年)

「カラヤンとウィーン・フィルの生み出す豪華でしなやかな演奏は、イタリアの指揮者やオーケストラからは聞き取れない精妙な音楽を「発見」させてくれる。剛毅な歌唱法で武骨な武人の苦悩を描き出すデル・モナコによるオテロは、狂気に至る愛の苦悩と、何よりもオテロの誇りの高さを描き出す、究極の歌唱の一つともいえる。豊かな声を駆使して堂々たるドラマを描くテバルディのデズデーモナ、プロッティのイアーゴも秀逸。」
(『クラシック不滅の名盤 800』、1997年)

[収録曲]

ヴェルディ: 歌劇「オテロ」(全曲)

4幕のドラム・マリコ/台本:アッリーゴ・ボーイト/原作:ウィリアム・シェイクスピア

[配役]

オテロ	マリオ・デル・モナコ(テノール)
デズデーモナ	レナータ・テバルディ(ソプラノ)
イアーゴ	アルド・プロッティ(バリトン)
カッシオ	ネッロ・ロマナート(テノール)
モンターノ	トム・クラウゼ(バリトン)
ロドヴィーコ	フェルナンド・コレナ(バス)
エミーリア	アナ・ラケル・サトレ(メゾ・ソプラノ)
ロデリーゴ	アトス・チェザリーニ(テノール)

ウィーン国立歌劇場合唱団

ウィーン・グロスシュタット少年合唱団

[合唱指揮:ローベルト・ベナーリオ]

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

指揮:ヘルベルト・フォン・カラヤン

[トラックリスト]

[DISC 1]

第1幕

- [1] 「帆だ！帆だ！」(キプロス人達、モンターノ、カッシオ、イアーゴ、ロデリーゴ)
- [2] 「喜べ！傲慢な回教徒は海中に沈んだ！」[オテロの登場](オテロ、キプロス人達)
- [3] 「ロデリーゴ、どうなさった、何を考えておられる？」(イアーゴ、ロデリーゴ)
- [4] 「喜びの火、楽しげな炎は」(キプロス人達)
- [5] 「ロデリーゴよ、飲みましょう、ここに杯があります」(イアーゴ、カッシオ、キプロス人達、ロデリーゴ)
- [6] 「さあ、咽喉をうるおして！」[乾杯の歌](イアーゴ、カッシオ、ロデリーゴ、キプロス人達)
- [7] 「副官、衛兵が堡壘で君を待っているぞ」(モンターノ、カッシオ、イアーゴ、ロデリーゴ、キプロス人達)
- [8] 「剣をひけ！」(オテロ、イアーゴ、カッシオ、モンターノ)
- [9] 「暗い夜の中に」[すでに夜も更けた](オテロ、デズデーモナ)

第2幕

- [10] 「いらいらなさるな」(イアーゴ、カッシオ)
- [11] 「行け！お前の目的はもう分かっている」(イアーゴ)

- [12] 「俺は信じる、彼自身の姿に似せて俺を創った」[イアーゴの信条](イアーゴ)
 [13] 「困ったことだな」(イアーゴ、オテロ)
 [14] 「まなざしの光り輝くところ」(キプロス人達、イアーゴ、デズデーモナ、オテロ)
 [15] 「私は、あなたのご不快を蒙って悩んでいる」(デズデーモナ、オテロ)
 [16] 「もしも知らないうちに、あなたに対して、罪を犯してしまいましたら」(デズデーモナ、オテロ、イアーゴ、エミーリア)
 [17] 「罪を犯したデズデーモナ！」(オテロ、イアーゴ)
 [18] 「貴様！退れ！出て行け！」(オテロ)
 [19] 「そして今は！・・・そして永遠にさらば、神聖な思い出よ」[さらば栄光よ](オテロ)
 [20] 「閣下、お心をお静めなさいませ」(イアーゴ、オテロ)
 [21] 「夜のことでございました」[夢の歌](イアーゴ)
 [22] 「おお！世にも恐ろしい罪だ！」(オテロ、イアーゴ)
 [23] 「そうだ、わしは大理石のような空にかけて誓う！」(オテロ、イアーゴ)

[DISC2]

第3幕

- [1] 「港の哨戒艇が大使の一行を」(伝令、オテロ)
 [2] 「続ける」(オテロ、イアーゴ)
 [3] 「ご機嫌がおよろしいのでございますね」(デズデーモナ、オテロ)
 [4] 「私は恐怖におののきながら、あなたの恐ろしいまなざしを見つめております」(デズデーモナ、オテロ)
 [5] 「神よ！あなたは私に、あらゆる悲惨な恥ずべき不運をお投げになりました・・・しかし、おお、悲しみよ、おお、悩みよ！」(オテロ)
 [6] 「カッシオがあそこにおります！」(イアーゴ、オテロ)
 [7] 「さ、おいでなさい、広間には誰もいません」(イアーゴ、カッシオ、オテロ)
 [8] 「だが、あなたの舌は」(イアーゴ、カッシオ、オテロ)
 [9] 「あれはヴェネツィアの船の到着を知らせず合図です」(イアーゴ、カッシオ、オテロ、キプロス人達)
 [10] バレエ音楽
 [11] 「万歳！万歳！」(一同)
 [12] 「総督ならびに元老院は」(ロドヴィーコ、オテロ、デズデーモナ、エミーリア、イアーゴ、紳士達)
 [13] 「諸君！総統は・・・」(オテロ、ロデリーゴ、イアーゴ、カッシオ、ロドヴィーコ)
 [14] 「ひざまずいて・・・そう・・・土色の泥にまみれ・・・」(デズデーモナ)
 [15] 「あの潔白なお方は、憎しみの身震いを」(エミーリア、カッシオ、ロデリーゴ、デズデーモナ、キプロス人達)
 [16] 「行ってしまえ！」(オテロ、一同)

第4幕

- [17] 「ご主人様のお心はずっと静まりましたでしょうか？」(エミーリア、デズデーモナ)
 [18] 「私の母は一人の気の毒な女中を使っていたの」(デズデーモナ)
 [19] 「寂しい荒野に歌いながら泣く」[柳の歌](デズデーモナ)
 [20] 「お恵み溢る聖母マリアよ」[アヴェ・マリア](デズデーモナ)
 [21] 「そこにいらっしゃるのはどなた？」(デズデーモナ、オテロ)
 [22] 「今夜のお祈りをすませたか？」(オテロ、デズデーモナ)
 [23] 「開けて！開けて下さいまし！」(エミーリア、オテロ、デズデーモナ、カッシオ、イアーゴ、ロドヴィーコ、モンターノ)
 [24] 「たとえまだほかに武器を持っていたとして、恐れなくて下さい」[オテロの死](オテロ、カッシオ、ロドヴィーコ、モンターノ)

[録音]1961年5月、ウィーン、ソフィエンザール

[初出]SET209~11(1961年)

[日本盤初出]SLX3-6(ステレオ)、LYX3-3(モノラル) (1961年11月10日)

[オリジナル・レコーディング]

[プロデューサー]ジョン・カルショウ

[レコーディング・エンジニア]ゴードン・パリー

[Super Audio CD プロデューサー]大間知基彰(エソテリック株式会社)

[Super Audio CD リマスタリング・エンジニア]杉本一家(JVC マスタリングセンター(代官山スタジオ))

[Super Audio CD オーサリング]藤田厚夫(有限会社エフ)

[解説]諸石幸生 三善清達

[企画・販売]エソテリック株式会社

[企画・協力]東京電化株式会社

エソテリック独占販売

エソテリック特約店にてお求めください。エソテリック特約店につきましては弊社ホームページの「製品展示・販売店のご案内」または「AVお客様相談室」へお問い合わせください。

ホームページ 製品展示・販売店のご案内 <http://www.esoteric.jp/support/shop/>

AVお客様相談室

0570-000-701(ナビダイヤル) PHS・IP電話からは Tel 042(356)9235/Fax 042(356)9242
受付時間:9:30~12:00/13:00~17:00(土・日・祝日・弊社休業日を除く)